

所長就任のご挨拶 「なぜ私が自動車・部品産業研究に注目するのか」

中嶋 聖雄

早稲田大学アジア太平洋研究科准教授 (社会学・アジア研究)

自動車部品産業研究所所長 (2016年4月～現在)

これまで、主に現代中国の映画・メディア産業を研究対象としてきた私が、なぜ今、自動車・部品産業に注目し、研究を進めているのか、をご紹介します、所長就任のご挨拶とさせていただきます。

まず、第一に、私が取り組んできた中国映画研究自体、文学部や芸術学部で行うような映画作品そのものの「テキスト分析」ではなく、映画の生産・配給・上映に関わる映画スタジオ・配給会社・映画館などが、1970年代末以降の「改革・開放」政策進展の中で、産業組織として、どのような戦略を取り、構造を変化させながら、発展してきているのか、という極めて産業論・組織論的な視点からの研究であることをお伝えしたい。博士号を取得したカリフォルニア大学バークレー校社会学部で執筆した博士論文は、The Chinese Film Industry in the Reform Era: Its Genesis, Structure, and Transformation Since 1978 (『「改革・開放」期の中国映画産業——その生成、構造と変動』)と題し、市場経済化と政府の役割の強化が(必ずしもゼロ・サム関係ではなく)同時進行しながら発展してゆくプロセスを経済社会学・組織社会学・文化社会学の理論と方法に基づいて明らかにしたものであった。また、2016～18年度、科学研究費補助金・基盤C(経営学)で進めている「現代中国映画産業の経済社会学——スタジオ間共同製作のネットワーク分析」と題する研究は、中国映画の生産データ——どのスタジオが単独あるいは共同で映画を製作したか——に関する計量データベースを作成し、ネットワーク分析の手法を駆使して、スタジオ共同製作のネットワーク構造の1978年から現在までの時系列的变化・不変化を明らかにすることを目的としている。「新古典派経済学」によれば、現代中国におけるような市場移行期の生産ネットワークは、匿名の生産アクターによる一回性の「非繰り返し共同」(non-repeat collaboration)に向かうとされるが、経済社会的アプローチは、市場経済における生産ネットワークも、社会的権力(例えば、国有スタジオに対する政策上の優遇)や過去の取引の惰性的継続のような社会構造に「埋め込まれており」(embedded)、「繰り返し共同」(repeat collaboration)のかたちをとった市場の「社会的構造化」(social structuration)が出現するものとみる。この映画生産ネットワーク研究は、上記二つの仮説の検証を行うことを目的としている。私が博士論文で扱った「市場経済化と政府の役割強化の同時進行」や、現在、科研費で進めている「市場経済化における生産ネットワークの社会的構造化」といった議論は、映画産業という特定の分野だけでなく、自動車・部品産業を含む幅広い産業論・産業組織論に応用可能な視点であり、自動車産業が急速に発展している中国を含むアジアの現状に鑑みても、中国産業論・アジア産業論を専門とする私にとって、自動車・部品産業の研究は、避けて通れない最重要課題の一つである。

第二に、私がこれまで専門としてきた映画を含むメディア・ICT (Information and Communication

Technology) 産業と自動車・部品産業が近年急速に関係性を深めているという点がある。もともと ICT 関連企業であるグーグルが、(最近その方向性の修正を余議無くされているとは言え) 自動運転の研究を進めていることは周知の事実だが、例えば、VR (Virtual Reality) のような映画・メディア・エンターテインメント産業で注目されている技術の自動車・部品産業への応用を通じて、私がこれまで研究してきたメディア産業と自動車・部品産業が、さらに連携を深めていく可能性は、自動車・部品産業研究の将来を考える上で、重要なポイントとなろう。本紀要の読者も、3D 映画館で 3D 映像の映画を見たことがあると思うが、近年ではさらに 4D と呼ばれる、雨や風、座席の振動、さらには香りのような物理的効果を演出する映画を上映する 4D 映画館も増えてきており、このような VR・AR (augmented reality) 技術を通じたメディア産業と自動車・部品産業の関係はさらに深まってゆく可能性がある。例えば、グーグルは、2015 年にすでに Jump と呼ばれる 3D360 度 VR カメラと映像スティッチング・ソフトウェアを発表しており、このような 360 度映像認識技術が自動運転技術と融合しうることは想像に難くない。さらに、グーグルは、Google Spotlight Stories プロジェクトの一環として、その高度な VR 技術を駆使して制作した、*Pearl* という VR 短編アニメ作品を 2016 年に発表しているが、そのストーリーが、父娘が Pearl と名付けた自動車に乗り込み、音楽を楽しみながらドライブするロード・ムービーであるのは示唆的である。この映画は全編、自動車の車内にいる設定であり、鑑賞者は、上下左右に自由に視点を動かして、多様なストーリーを体験できるように創り上げられている。私がこれまで研究してきた映像・メディア産業の将来的発展・拡大・異業種との融合の方向性を展望するためにも、自動車・部品産業研究は必要不可欠である。

第三に、上述二点のような経済論・産業論的な視点に加えて、社会学者として、自動車・部品産業、特に近年進展している自動運転・安全運転というような最先端技術を、社会・文化論的な視点から、考えていきたいと思っている。例えば、「自動車が必然的に完全自動運転に向かってゆく」という議論は、「人間は、自分の体力・知力というコストをなるべく払わずに、目的地により早く到達することを利得と考える」という狭い意味での経済合理性を前提としているが、より広い社会・文化的な合理性を考えると、必ずしもそのようには言えない。例えば、しばしば指摘されることだが、「自動車を自分で運転する楽しみ」に重きを置く人々は依然多く、完全自動運転技術が実現しても、すべての自動車が完全自動運転車になるかどうかには、議論の余地がある。むしろ、「なるべく自分の体力・知力を使わずに目的地に到達する手段としての自動車」と「運転を楽しむための自動車」のように二分化する可能性もある。その場合は、前者は、むしろよりフレキシブルな公共交通機関のような役割を果たすモノになるのかも知れない。いずれにしても、ヒトとモノ——自動車、あるいは自動運転のような技術——との関係は、単線的進化をたどるのではなく、社会・文化的文脈によって規定される、という視点も重要であろう。社会学では、「科学技術社会論」(Science, Technology, and Society [STS]) という分野が、このような「技術の社会的構成」の視点を提供している。例えば、この分野の代表的論者である、フランスの社会学者ブルーノ・ラトゥールは、ヒトとモノのネットワークによって社会が構成されていることを説く「アクター・ネットワーク理論」(Actor-Network Theory) を駆使して、『アラミス、あるいは技術への愛』(Bruno Latour. *Aramis, or the Love of Technology*. Trans. Catherine Porter. Boston: Harvard University Press. 1996 [仏語版 1993]) という著書を執筆している。この著

作は、1970～80年代に、フランスのパリで実際に構想された完全自動運転の個人用公共交通システム「Aramis」(Agencement en Rames Automatisées de Modules Indépendants dans les Stations; 英語では Automated trains of independent modules in stations) の失敗を、政策立案者—技術者へのインタビュー調査、また技術やモノそのものの「能動性」(agency) を観察することによって、人間と技術のネットワーク＝関係性として記述するものであり、現代の自動車産業における自動運転技術の将来像を考える上でも、非常に示唆に富む研究である。このように、社会学者として、自動車・部品産業研究を、文化・社会論的に展開してゆくことも進めていきたい。